

氏名（本籍地）	金子 はな（千葉県）		
学位の種類	博士（文学）		
報告・学位記番号	甲第446号（甲（文）第51号）		
学位記授与の日付	平成31年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第1項該当		
学位論文題目	蕉風俳諧研究 ― 惟然・支考の「軽み」受容を中心に―		
論文審査委員	主査	教授	博士（文学） 谷地 快一
	副査	教授	博士（文学） 中山 尚夫
	副査	教授	博士（文学） 菊地 義裕

学位論文審査結果報告書〔甲〕

【論文審査】

本博士学位論文は、俳文学研究、とりわけ松尾芭蕉(1644～1694)とその系譜が伝える「軽み」という俳諧理念について、広瀬惟然(?～1711)と各務支考(1665～1731)という二人の門人の活動や人生観の考察を通して新しい解釈を提示するものである。

惟然は四十歳前後の元禄元年(1688)に、支考は二十六歳の元禄三年(1690)に入門した。それは芭蕉が「軽み」を説き始める『おくのほそ道』行脚(1689)の前後にあたり、その後は芭蕉の臨終(1694)まで付き随って、親しく教えを受けた。だが、惟然は芭蕉没後に師の発句を和賛に仕立てた「風羅念仏」を唱えて追善行脚するという奇行が災いして等閑視され、支考は芭蕉をしのぐ理知と俗耳に入りやすい俳諧教導によって褒貶入りまじり、その評価は一定しない。よって、この二人を軸に芭蕉俳諧を論じる意義は大きい。

俳文学は連歌俳諧の意である。連歌は日本武尊と乗燭者との問答(『日本書紀』)や家持と尼との唱和(『万葉集』巻八)に始まり、卑俗・滑稽を旨とする時代から、純正・優雅を達成する歴史を歩んで室町期(宗祇の時代)に和歌的情趣を取り戻す。その連歌を兄とする俳諧は歌語から俗語へと裾野とひろげ、連歌同様に初期の知的な言語遊戯の時代を克服し、近世期に消閑の遊びから人生を把握する手段として熟成する。その立役者が芭蕉で、俳諧における自己実現の方法を「軽み」という言葉で説いた。すなわち、その警咳に接した惟然や支考の語り方、生き方が重要な所以である。

しかし、「軽み」に関する芭蕉の言説は概念(意味)でなく、俳諧の座(会席)の具体的指導(作品批評)として語られた。よって、受け取り方も語られ方も門人によって異なった。「軽み」を説く以前の古参の門人と、実践指導の最中にあった惟然や支考とでは、芭蕉理解に食い違いが生じたのである。本論文は三部構成によって、その評価が定まらない二人の門人を検証し、文学史の見直しを迫るもので、その核心は以下の通りである。

第一部の「俳論と作品にみる「軽み」意識」では、第一章で「軽み」論の先行研究全体を精査し、その概念の混乱が研究の拡散と細分化、つまり「軽み」に見届けようとする「精神性(詩心の高さ)」の食い違いによると判断した。さらに、その整序のために芭蕉の「かかり」という評語、惟然の景気(景色・情景)と口語調、支考の俗談平話(通俗性の尊重)と姿情論(眼による対象把握の優先)という三点の検証の必要性を強調した。

すなわち、第二章では、「花見の句のかかりを少し心得て、「軽み」をしたり」(土芳『三冊子』)と、芭蕉が初めて「軽み」の実現を明言して、研究史上議論の絶えない歌仙発句「木のもとに汁も鱈も桜かな」(1690)の諸説を吟味した。

この「かかり」という語は、「木のもとに」の発句真蹟に「先づ初花をいそぐなる近衛殿の糸桜、見渡せば柳桜をこきまぜて、都は春の錦燦爛たり」(謡曲『西行桜』)を前書とするものがあることを重んじて、「この謡曲の浮き浮きした雰囲気が発句のリズムに通っている」(櫻井武次郎「かかり」、『総合芭蕉事典』)ことを意味するというのが定説である。すなわち、連歌論における「リズムの追求」と同じで、「ことばの続けがらによる流動的・律動的な声調美」(尾形侑「かるみ」、『芭蕉の本』)を「軽み」とする見解にしたがうものである。他方、「軽み」をこうした音楽性に求めず、「汁も鱈も」を日常語として、一種の慣用的成句とみて、趣向や理知を排除した「通俗性」と定義する見解もある。いず

れにしても、これまでは表現の抑制や平明に「軽み」を見てきたのである。

これらに対し、本論文は先掲の「花見の句のかかり」(『三冊子』)が謡曲の物真似における「女がかり」「物狂のかかり」「鬼がかり」の用例に同じであり、「曲舞がかり」(曲舞の特徴的な演じ方)や「大和がかり」「金春がかり」(能の流派ごとの演じ方の特色)などの例に通じるとして、芭蕉の意図は「いかにもそれらしい様子」にあると結論づけた。「木のもとに」という発句に即していえば、「いかにも花見の句らしい様子」という意味である。これは梅の蕾みに春の始まりを言祝ぎ、落花(桜の散るさま)に春を惜しむ本意に叶って明快である。また、「汁も鱈も」に日常語や慣用的表現としての「軽み」を読み取る従来説には、研究史が言外に、故郷の料理の味を思い出して、官を辞して帰郷する中国の故事「蓴羹鱸膾」(『蒙求』「張翰適意」)の面影を読み取ってきた以上、無理があるとして退けた。

他方、「過剰な表現」を「古び」や「重み」と定義し、その「抑制による渋滞感の打破」(尾形侑「かるみ」、『俳文学大辞典』)を「軽み」とする定説に対して、「そもそも、自らが「重み」「古び」のただ中にいるとき、果たしてそれを「自覚」し、「打破」しようとする意思が生じるだろうか」と疑義を呈し、「「重み」「古び」の弊を打開するために「軽み」が編み出されたというのは順序が逆で、先に「軽み」という足場を獲得したからこそ、(中略)「古び」「重み」を自覚できた」と結論づける。「心の色うるはしからざれば、外に言葉をたくむ」(『三冊子』)その他の例を引いて、「重み」とは眼前にあるものの美しさを発見できていない心の状態であって、そのために表現が複雑になり、余計なものを加えてしまうという見解は新鮮である。

続く第三章「惟然の「軽み」一景気と口語調」は、惟然(前号素牛)が芭蕉から頻繁に俳諧指導を受けた時期を元禄二年(1689)から同四年(1691)の間と、元禄七年(1694)の芭蕉終焉の旅に従った五ヶ月ほどの間であることを確認し、惟然が編んだ撰集『藤の実』(1694)は芭蕉の承認を得た出版であり、その俗語調の作品が芭蕉の「軽み」論に矛盾しない証左を提示した。

さらに、とかくの批判(去来・許六『俳諧問答』、李由・許六『宇陀法師』)のあった惟然の口語調俳諧については、芭蕉生前の用例を示して、その批判が当たらないことを説き、伊賀蕉門の作風とされる「あだなる風」(無心、無邪気な作風)と合わせて、「軽み」の一体であることを明らかにした。

また、第四章「支考の「軽み」一俗談平話と姿情論」は、惟然同様に芭蕉の晩年に入門し、「軽み」を実践した撰集『続猿蓑』(1694成立)の編集に深く関わり、師の臨終に寄り添っては遺書三通の代筆を命じられた支考を取り上げ、その言説から芭蕉の「軽み」論を補強する。

すなわち、支考の「俗談平話」論は「言語(ことば)は情(こころ)の変化によって生じる」という不可分の関係を基礎にして、「言語を知るとは情を知ることであり、言語を正すことは情を正すことにつながる」という、情(こころ)に対する向き合い方の論であると指摘する。また、この「正す」とは「世間の理屈」を捨てて、「風雅の道理」つまり、詩文の論理に従うことであって、俳諧の徳とは、そうして達成された俳諧(作品)が人心(世上の人々の心)を整えるところにあると結論づけた(『芭蕉翁廿五條解』)。

さらに、支考の「姿情の論」について、これは「ことば」で形象されたイメージ(姿)と、対象に向かう心の働き(情)に関する考察で、理論上は「姿情の融合」が理想だが、芭蕉晩年の「軽み」論においては、個別の事情を「ねばり」としてしりぞけ、「巧む」ことや「理屈」に走ることを嫌った。それを「姿先情後」の名で芭蕉俳諧の到達点として説いたのが支考であったが、研究史上その言説はなかなか受け容れられなかった。その頑冥を打ち破り、支考と芭蕉をつないだ研究に堀切実・中森康之らの考察があることを補足し、彼らの研究を継承発展させる意思を明らかにした。

その上で、従来説では、支考の『二十五箇条』「発句像やうの事」に見える「目をもて俳諧を見るべし」「画に準らへて」「姿を先にして、心を後にする」という言説が、一見「姿」(表現)を重視し、「心」(情)を軽視するように読めるために、それが支考一派の実作における低俗化・浅薄化という批判につながった。だが、支考の真意は「物に情あらば姿なからんや」(支考『俳諧十論』)、つまり、事物に本意・本情があるならば、それが姿としてあらわれるはずだという、言語と心は不可分という意見を前提にしている。よって、「姿先情後」とは情(こころ)を損ねないように句の姿(言葉)を整えることでもあって、それが「画に準える」ということであり、ゆめゆめ「心」(情)の軽視ではないと結論し、「軽み」の受容史に一石を投じている。

さて、第二部「俳壇形成の特質とそのゆくえ」は惟然と支考の二人が芭蕉に学んだ「軽み」論を地方行脚によって外部へとひらいてゆく歴史である。

第一章は両者に共通する「地方行脚における唱導」の検証である。

元禄八年(1695)、惟然は筑紫行脚にあつて、豊後日田の医師である朱拙と親交を結んだ。朱拙は談林俳諧に遊ぶ俳人であったが、惟然との出逢いが契機となって蕉風に転じ、惟然の指導下で撰集『梅桜』(1697)を編んだ。本論文はそこに見える二人の対話や作品を吟味し、古事や古歌を直接には引用せず、読者の知識を触発するほどに距離を置く手法が、面影という蕉風そのものであることを確認し、地方における惟然の俳諧指導が「軽み」の行き方と矛盾しないことを明らかにした。ちなみに、これ以後の朱拙は惟然に倣って旅を好み、蕉門俳人と交流しては『けふの昔』(1699)その他の撰集を出版し、蕉風の弘布に一役買う人生を歩んだ。

また、惟然は元禄十二年(1699)から翌三年にかけてと、同十五年(1702)の二度にわたり播磨に旅をする。とりわけ、二度目の行脚は芭蕉の発句を唱え、瓢箪を木魚代わりに叩きながら踊る、いわゆる「風羅念仏」の長旅で、その目的は芭蕉像を建立して師の面影を残すための勧進である。そこで惟然が説く俳諧の定義は「戯言俗諺、飾り無く、巧み無く、突然として頓に出でて思慮を煩はさざる、此れ之を俳諧と謂ふ也」(『二葉集』「俳諧芸に非ず」)である。これは「実に入るに、気を養ふと殺すとあり。気先を殺せば、句、気に乗らず。先師も俳諧は気に乗せてすべしとあり」(『三冊子』)とか、「席に臨んで、文台と我との間に髪を入れず、思ふ事速やかにいひ出でて、ここに至りて迷ふ念なし」(同)という芭蕉の言説を踏まえた、「無分別」(理屈を捨て、自分の意に従い、口に任せる)という奔放な句作態度であるが、その囚われないところが「軽み」からほど遠い観念句を生む欠点を露呈した事実も否定しない。この研究姿勢は、「軽み」を継承しながらも、一門から誤解される行き過ぎが惟然にあったことを認めて公平である。

他方、行脚俳人としては惟然以上に各地をめぐり、地方俳人に蕉風俳諧を説いては、それを書物にまとめた支考からは、元禄十四年(1701)の北越行脚の産物である『東西夜話』(1702)を取り上げ、そこに収載される「夜話」(俳話)から「軽み」を示唆する言説を抽出する。すなわち、「風雅はすなほなるべし」「無性に案じぬが能きなり」「其座に臨みては只無分別なるべし」などがそれで、「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(業平・古今・春)を踏まえた「物のあくまで見るまじきいさめ」や、古人の定めた格式(学問)は初心者に向けた梯子のようなものだから、覚えてしまえば用なしであるとする「学文は階子也」、俳諧は日常会話と同じだから、話しかけるようにせよという「俳諧は平生をはなれず」など、支考のすぐれた教育者ぶりを浮かび上がらせることに成功している。それは惟然門の千山編『当座弘』(1703)等の記事にみえる「無分別」の言説に共通し、惟然・支考両者の「軽み」論の出所が芭蕉以外に考えられないことを証明する結果をもたらしている。

第二章は惟然・支考に共通する「芭蕉供養のかたち」の検証である。

惟然が芭蕉像を師の墓所である義仲寺(滋賀県大津市)の無名庵に安置することをめざして勧進をおこなったことは、すでに鈴木重雅著『俳人惟然の研究』や沢木美子著『風羅念仏にさすらう』などに研究が備わっている。本論文は、その勧進が「風羅念仏」の制作・実演と並行して進められていたことを追認しつつ、芭蕉像が当初予定の義仲寺ではなく、京都岡崎の惟然の草庵風羅堂に安置された事実は、その芭蕉追善活動が蕉門俳人すべてに支持されたわけでないことを意味し、惟然没後は播州姫路の俳人に受け継がれてゆく歴史を追認した。

一方、支考は寄付を募って西行ゆかりの京都東山の双林寺に「仮名碑」を建立した。この碑には類似の芭蕉供養碑とは異なり、和漢の修辞を複雑に組み合わせた五七調の碑銘が刻まれているが、その難解さが災いして、これまで詳しい検証はない。そこで、支考が重視する修辞(起結・謎文・韻字の法の三点)に注意を払い、主に支考が著した碑文の注釈書『碑銘秘註』(1713)を参照しつつ、その解読に挑戦して成功した。

その結果、「仮名碑」建碑の主目的が芭蕉供養と顕彰にあるは当然ながら、碑文に隠された内容が芭蕉の俳諧人生の全体を具体的に示していることを解き明かした。さらに、中国の逸話集『世説新語』(5世紀前半)の記事をもとに、難解の原因である修辞は、実は中国の孝女曹娥を悼む碑を称えた蔡邕が、その碑陰に付した謎文(八字の題)の趣向で、支考が和文の碑に応用したことを確認した。その上で、謎文や韻字の解読が先掲の『碑銘秘註』なしに解明できないことを支考自身が自覚し、彼が好んで作った「仮名詩」(俳諧から生まれた韻文で「和詩」「俳詩」とも)にも、好んでそれを用いたことを示した。さらに、韻字は漢詩風の発想と清輔の歌学書『奥義抄』を参看し、独自に施したものであることを明らかにした。

ところで、この「仮名碑」銘の修辞の難解さが、俗談平話を旨として「軽み」を説く支考の俳諧指導理論と整合しない点は、長く支考への信頼を揺るがすものであった。本論文はこの問題について、「仮名碑」を建立する追善という意図と、人生把握を試みる俳諧の実践とは別の営みであるとし、両者に整合性を求めること自体に無理があるという見解に至っている。なお、惟然の芭蕉顕彰と同じく、この双林寺における芭蕉供養も支考一代で終わることなく、彼を祖とする美濃派俳人の尊崇を集め続け、後代まで芭蕉顕彰の象徴であったことを附記した。

第三部「俳諧観と人生観」では、総合的な観点から、惟然・支考の生きる思想に「清貧」「一生不住(一所不住)」「世情の人和」を尊ぶ人生規範があり、それが生活の実践に重なっていることを説く。そして、これは実生活で人が守るべき「世道」と、風雅に遊ぶ者が志す「俳道」を一つの世界と断じ、元禄四年(1691)に「世道・俳道、これまた齊物にして、二つなき処にて御座候」(支幽・虚水宛芭蕉書簡)と説いた芭蕉の思想に矛盾せず、「かかり」すなわち「いかにもそれらしい様子」の把握をめざす「軽み」は、現世の一瞬一瞬を俳諧にすくい取る「純粹誠実」の精神性から生じた概念にほかならないと結論している。

【審査結果】

以上の通り、本論文は従来の研究史の克明な整理と分析の上に新見を有する、実証的かつ独創的なものであり、その論理と学識は俳文学(連歌俳諧俳句)研究の今後に寄与し、日本の詩歌の可能性を示唆するもので、学位請求論文提出者が高度な専門的業務を遂行するに十分な学識と能力とを有していると判断する。また、文学研究科(日本文学文化専攻)の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容である

と認められる。

本審査委員会は、金子はな氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査結果に基づき、全員一致をもって本学博士学位を授与するにふさわしいものと判断した。

本博士学位論文の一部は以下の学術誌に掲載された。

惟然の「軽み」考	連歌俳諧研究 124(2013.3)
支考「仮名碑銘」の成立と展開	連歌俳諧研究 134(2018.3)

以上